



CONTENTS

- 矢作川学校ミニシンポジウムの残したものの
- 私の研究に向かって
- 矢作川ミニシンポジウムに参加して
- 第2回矢作川学校ミニシンポジウムを終えて
- 今月の一枚
- 10歳になりました！

今月は…ミニシンポジウム

4

2006.4 No.95

矢作川学校ミニシンポジウムの残したものの

梅村 諒二

去る3月4日(土)、第2回矢作川学校ミニシンポジウムが参合館で開催された。昨年の第1回のミニシンポは、計画が若干遅れ高校生の受験シーズンとも重なり、日程調整がつかず参加者が限られてしまった。今回は早めに計画し、関係の高校・大学の先生方とも連絡を取り合ったこともあり、全面的な協力を得たので、発表者・参加者ともに多く、充実したシンポとなった。関係者に改めてお礼申し上げたい。

発表は高校生2題(豊田西、瑞陵)、大学生13題(名城大、学泉大、愛工大、椋山女学園)、大学院生1題(名古屋大)の計16題で、発表者は27人にのぼった。また、参加者も多く、広い参合館の7階の部屋が満席になるほどの盛会ぶりであった。

発表内容は矢作川に生息するアユ・カワウ・水生昆虫・カワヒバリガイ・メダカ等の研究に加えて河川の水質汚濁、カメ等の外来種問題など多岐にわたったが、いずれも環境問題として話題になっている今日的課題が多く、参加者にも好評であった。また、ニホンイシガメの性の決定が温度により左右される仕組み、河川の水質悪化に人口増と水量不足が大きく関係するという報告、さらに、絶滅危惧種を保護するために河川工事計画の変更にいたる活動等の長期にわたる取り組みも報告され、全体的に質の高さを伺うことができた。

さて、今回のミニシンポを通じて気のついたことを挙げると次のような諸点である。

- ・ 計画段階で予想した以上に発表者・参加者が多く、このことがシンポ全体を盛り上げ成功につながっ

たと言える。質疑応答も活発であった。

- ・ 取り組んでいるテーマから環境問題に関心をもっている高校生・大学生が予想以上に多いことが伺えた。
- ・ 矢作川の課題となっているアユの不漁やカワウの被害、アユの釣果とカワシオグサとの関係、水質汚濁の実態等の発表があり、矢作川の環境問題に関心が高いことが分かった。
- ・ 今回のシンポが成功した理由の一つに、関係する高校や大学の先生方の協力があつたことを挙げることができる。今後も継続してご協力を願いたい。
- ・ 会場が駅に近く、駐車場もあり、広くて新しい参合館であったことも盛会につながった。

今回のシンポに参加し発表した高校生・大学生にとっては極めて貴重な体験であり、今後の研究や発表の自信にもつながるものと思われる。この経験をエネルギーに、今後大きく成長し、環境問題と積極的に取り組まれることを期待したい。

終わりに積極的に計画・準備に取り組まれた矢作川学校の事務局の皆様、ご協力いただいた関係の高校や大学の先生方に重ねてお礼申し上げたい。この事業は、今後も一層拡充していく予定なので、継続して関係の皆様のご理解とご協力を賜りたい。

(うめむら じゅんじ、

財団法人愛知教育文化振興会 常任顧問)

私の研究に向かって ～矢作川学校ミニシンポジウム感想～

溝口裕太

昨年も多くの研究発表が行われた矢作川学校ミニシンポジウムでありましたが、今回は昨年以上に多くの発表があり、発表者も高校生から大学生、大学院生と幅広い年齢層となりました。

質疑応答の場面では、いろいろな質問が飛び交い活発な議論が行われました。発表者からみれば、いつもとは違う切り口から意見を聞くことができたのではないかと思います。

私はこのシンポジウムを通じて、研究の進め方、データを解釈する上で大きなポイントを学ぶことができました。

測定方法の決定に関しては、その後のデータの精度を大きく左右するものなので、慎重に考えなくてはならず、なぜその測定方法にしたのか明確な理由も必要であります。また、測定条件については、データの信頼にもかかわる事項なので、測定時には環境条件や、

測定設備などについても記録が必要であると再認識しました。そして測定したデータの解析については、発表者自身の経験を踏まえ、測定方法、測定条件、データ数などを十分に考慮し、一つの見方をして納得するのではなく、いろいろな切り口からデータを解析することが大切であると感じました。こういった多角的なデータの解析は難しいと思いますが、人の意見を聞くことから取組み、それを研究に取り入れていけば、より良い研究、また、自分が成長することにも繋がると思います。

私は、4月から最高学年になり卒業研究に取り組みます。この発表会に参加した経験を今後の私の研究に活かしていきたいと思います。そして、私の研究を来年の矢作川学校ミニシンポジウムで発表したいと思います。

(みぞぐち ゆうた、

豊田工業高等専門学校 環境都市工学科)

矢作川ミニシンポジウムに参加して

米津利仁

本校自然科学部では、4年前から地域の河川や土壌の環境調査を行なっています。校内の化学室は設備面では決して恵まれているとは言えないのですが、そこは歴代の部員たちと文献等を調べ、知恵を絞り合いながら、高価な機材がなくてもガラス器具と限られた試薬等で地道に継続できる環境調査方法を探し出してきました。その一つが「n-ヘキサンを用いた河川水の油分の測定」でした。

この調査結果の報告は、これまでも高文連自然科学専門部の発表会や、日本化学会東海支部の発表会でさせていただきました。そしてこの度、矢作川研究所

の主催による矢作川ミニシンポジウムでも発表をする機会に恵まれました。大学生のみならず同じ場所で発表できるという大変光栄かつ貴重な機会をご提供いただき、改めて関係の皆様へ感謝申し上げます。

部員たちはいつもの高校生だけの発表会とは違う雰囲気にも多少緊張していた様子でしたが、本校自然科学部の新しい歴史を刻む発表を堂々としてくれました。研究所の方々からお褒めのお言葉をいただき、「限られた条件の中でも充実した研究と発表ができるのだ」という自信を一層強いものにできました。

また、4時間という短い時間の中で、生物系のみならず多岐の方面からの河川環境に関する研究発表を聞くことができ、大変勉強になりました。日頃化学系の研究が多い私たちには、これらの発表の内容は良い刺激となりました。

今回のシンポジウムへの参加をきっかけに、これからは矢作川研究所の皆様とのパイプを一層強いものにして、いろいろとご指導や助言をいただきながら、豊田市とその周辺の地域の環境に関する見識を、もっと深めていきたいと考えております。

(よねづ としひと、

愛知県立豊田西高等学校自然科学部 顧問)



第2回矢作川学校ミニシンポジウムを終えて

高橋 聡

みなさま、唐突ですが「ガイア仮説」というものをご存じでしょうか。地球をひとつの「生き物」と解釈して観察・分析する方法としてイギリス人科学者J. ラブロックにより提唱されたものです。このかなり乱暴な比喩表現は、さまざまな科学者の賞賛と反論とを招き、さまざまな議論が巻き起こりました。これらの議論に決着をつけるべく、1988年に国際会議が持たれ、互いに顔も知らない、さまざまな分野の科学者がガイア仮説を攻撃する材料を用意して続々と集まりました。

ラブロック先生の上手いところはここからです。ガイア仮説を徹底的に糾弾する科学者に対し彼は、刺激的な分析により会議の場に多くの有意義な討論を生み出せることに感謝する、と簡単に述べます。ガイア仮説の誤りを指摘するなんてことはどうでもいいことだ、いろんな視点がわあわあと交差すること自体が大事なんだ、ということでしょう。集まった科学者たちは、呆然となりましたが、1週間の会議は結局、攻撃の場ではなく交流討論の場として大変有意義に終わりました。



「矢作川学校ミニシンポジウム」で私たちが雛形としたのは、実はこのガイア会議なのです。出席者の皆様からいただいたアンケート結果の中に、「さまざまな分野の研究が見られて本当によかった」というお声を見ると、始めてよかったなあと思います。一方今年度は、「高校生と大学生はわけるべき」「分野ごとにわけるべき」「テーマごとにわけるべき」「矢作川に直接的なかわりがないものはやめた方がよい」といった意見も頂きました。

「川とその流域」という非常に大ざっぱなくくりでミニシンポジウムをスタートした私たちですが、早くも2年目にして、「分野の異なるさまざまな視点が

交差する」だけでは駄目である、さまざまな視点を結びつける（ゆるやかでもいい）テーマがどうしても必要とされる段階に到達したということになるでしょうか。こうしたご批判を真摯に受けとめ、次年度は更にパワーアップした「ミニシンポジウム」を企画して参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

◆アンケート結果より

印象に残った発表については、『実は知られていなかったニホンイシガメの性決定について』がもっとも多く、ついで『カワウの食性』『愛知県知多半島のため池の水生动物の生息状況、特にカメ類の現状と外来動物の進出について』『矢作川におけるカワヒバリガイの生息状況』『ロードキルから見た愛知県における哺乳類の生息状況』が次点となりました。昨年度のアンケート結果では、①今日的な問題（関心）につながっているか、②大きな動物を取り扱っているか、が印象を左右していたようですが、今年度も同様の結果となったようです。

また取り組みについて課題とすべきさまざまなご意見をいただきました。以下にその一部をご紹介します。

- ・ 題目がバラバラで、取り組みの目的が見えてこない
- ・ とても難しく発表内容がよくわからないものもあり、高校生と大学生を分けてシンポジウムを行ってもよい
- ・ 調べるだけでなく、今後の対策を述べているが、大衆にできることも提示してほしい
- ・ 結果だけでなく「なぜそれを行ったか」「その結果からどういった考えに至るのか」を明確にするべき
- ・ わからない単語など、多く説明してほしいことがあった
- ・ 専門用語を連発されると、その分野の知識に長けていない人にとっては退屈で面白くない
- ・ とても面白い発表内容なのに、配付資料がないものがあり残念であった

これらのご意見に対しまして事務局も鋭意取り組んでまいりたいと思います。

(たかはし さとる、

「矢作川学校ミニシンポジウム」事務局)



今月の一枚

シュンラン

2003年4月19日 豊田市西広瀬町
(田中 蕃 撮影)

10歳になりました！

ちごのくち 児ノ口公園設立10周年記念式典

日時 平成18年4月9日(日)
午前9:00～午後3:00
場所 児ノ口公園(豊田市久保町3-27-24)
問合せ先: 成瀬 (090-4155-5835)

近自然公園として整備された児ノ口公園では設立10周年を記念し、式典が開催されます。昔懐かしい祭りやみこし引廻しのほか、駄菓子のお店なども予定されています。里の春を満喫しに、ご家族でお出かけください。



児ノ口公園 (杉山亘氏 撮影)



天然アユ調査会を支える調査員たち

「矢作川天然アユ・シンポジウム」

日時 平成18年5月7日(日)
午前1:30～4:30 (交流会5:00～)
場所 あいち豊田農協2階ふれあいホール
問合せ先: 豊田市矢作川研究所内

矢作川天然アユ調査会事務局(0565-34-6860)

矢作川天然アユ調査会の地道な活動は、矢作川と三河湾を歩き来する天然アユの生態の解明に大きく貢献してきました。当調査会の発足10周年を記念し、研究活動の成果をご紹介しますとともに、天然アユへの感謝の気持ちと保護の気運を高めます。

お詫び 先月号で「三水湖」の名称の由来を「御船川・一の瀬川・矢作川が合流」としましたが、「御船川・カ石川・矢作川」の誤りでした。ここに訂正し、編集の不手際をお詫び申し上げます。



編集後記

去年の今頃開幕していた愛・地球博では、「自然の叡智」をテーマに、人が昔から自然と上手につき合ってきた手法を取り入れたローテクノロジーも数多く紹介されていました。矢作川学校ミニシンポジウムも若い学生さん達とともに「矢作川の叡智」を生かし、未来の矢作川流域を創造する場となれば良いなと感じています。(内)